

盤珪禪師と支考

——写本『白馬経』にみえる「芭蕉伝」「支考伝」について——

堀 切 実

「不生禪」に名高い盤珪（永琢）は、元和八年播磨の生まれ、

元禄六年七十二才で入寂するまで、郷里浜田の本山龍門寺をはじめ、京山科地藏寺、美濃日立玉龍庵、伊予大洲如法寺、平戸藩雄香寺、江戸麻布光林寺などを拠点に、その独自の庶民的な説法をもつて、ほとんど日本全国を行脚布教して歩き、多くの帰依者を生み出した禪門の名僧である。これに対し、蕉門の論客各務支考は、寛文五年美濃の生まれで、幼少にして郷里の禪刹雲黄山大智寺に入り、禅僧としての修業を積んだが、十九才下山して、のち元禄三年春二十六才にして芭蕉に謁見、その晩年に仕え、特に俳諧の地方伝播における最大の功績者である。

ところで、盤珪禪師は寛文十二年五十一才のときには妙心寺住持の任にも当たっているごとく、その禅流は妙心寺系であり、支考の入山した大智寺もまた妙心寺派であった。しかも、一方は「平話」説法による民間への布教、他方は「俗談平話」の実践による美濃派俳諧の伝播といったぐあいに、この両者の姿勢には、共通

した何かが感じられる。そして、ここに紹介する美濃派伝書『白馬経』の「支考伝」には、紛れもなく支考の盤珪への参禅説が見出されるのである。

しかるに、先般湯沢賢之助氏の論文「盤珪禪師と芭蕉」（『言語と文芸』第五十九号・昭和四十三年七月刊）によって詳しく論及されたところであるが、松浦静山の『甲子夜話』（文政四年起稿）の説によれば、芭蕉もまた、この盤珪の教えをうけた一人であったという。その参禅がいかなるかたちのものであったかは不明であるが、いづれにしても、芭蕉参禅の師としての盤珪の名は従来全く問題にされてはいなかっただけに、『甲子夜話』の説の登場はやや意外の感がある。

そこで以下、写本『白馬経』にみえる「芭蕉伝」「支考伝」の紹介を兼ねつつ、盤珪をめぐる両者の参禅の真偽について、私見を述べてみたい。

写本『白馬経』（^{註2} 県立岐阜図書館蔵）は、題簽に「^{正風}要領白馬経全」、内題「白馬経」とみえ、獅子庵蓮二房（支考）の序跋（月

日不明)を備え、さらに「寛延二己巳のとし仲秋 五竹坊」による奥書以下「文化十二乙亥年正月 無為窓右琴」に至る伝写の系統をうかがうことができる一書である。題号「白馬経」は、仏家の「白馬東来」の意をうけるものであり、美濃派に「芭蕉遺経」と称して伝来するものの一つとして、次の十七ヶ条の内容を含んでいる。

- 正門一道建立の意 附タリ口伝の事 ○芭蕉翁の伝 ○獅子菴蓮二の伝 ○老後を樂しむ俳諧の事 ○冷暖自知の事
- 秘授口伝の事 ○五秘五脇の伝 ○一座の捌秘伝の事 ○変化の概 ○文章の伝 ○娑情の十七ヶ条の口伝 ○名所二十五ヶ所の口伝 ○芭蕉の口授の事 ○俳諧十二ヶ条の心得 ○我家の金言の事 ○多名を弁ずる事 ○白馬の要言

本書の成立時期は、右の十七ヶ条中の記事の点検、すなわち支考晩年の三部書『俳諧十論』(享保四年刊)『十論為弁抄』(享保十年刊)『俳諧古今抄』(享保十五年刊)の所説が随所に引用注記されていること、および所収「支考伝」(後掲)にみえる「俳諧を説事四十年」の記述が、あたかも支考六十八才の没年に合致することなどからみて、支考の序跋を備えるにもかかわらず、支考没後の享保末以後であったと推測される。ただし、『白馬経』の書名は前記三部書にすでにかがわれ、五竹坊「奥書」によっても、本写本『白馬経』の母胎をなすべき正『白馬経』とでも称すべきものの存在が想定されるわけであるが、この点に関しては別稿を期したい。

註1 『甲子夜話』の芭蕉盤珪参禅説については、すでに萩原羅

月著『芭蕉の全貌』(昭和十年刊)第四章に、一異説として、指摘、紹介されている。

2 写本『白馬経』は、他に天理図書館本『俳諧白馬経』(嘉永三戊卯夏、三世葛門泊呼斎渭水書写本)、高木蒼梧氏一部紹介本『白馬経』(其日庵錦江書写本、『獅子吼』昭和25・11所収「著書から観た支考」による)がある。

3 「歴代三宝紀第四後漢録に、羽林中郎等は月支国に於て仏教四十二章経を写得し、并に画像を獲て載するに白馬を以てし還りて雒陽に達し、因て伽藍を起して白馬寺と名づく」(『仏教大辞典』)特に禅家ではこの四十二章経を珍重し、仏祖三経の一として諷誦する。

二

写本『白馬経』第二条「芭蕉翁の伝」の全文は、次のごときものである。

時至らざる時は玉流井藻塩の時節あり。時至れば、桃青はせと人の敬へる時節来れること何ぞ。翁も翁たるは、初よりの事にあらず。名人は私を離れて造化に随ひ人情を察す。下手は己が物数寄に依りて天地に迷ひ平生にうとし。などか修力造心あらずんば有べからず。翁は正保元甲申に生れて、元禄七甲戌のとし十月十二日五十一才にして没す。通世は延宝七己未のとし、三十六才の時、仏頂和尚の禅室に交り、はじめて一眼力を得たり。その證明に、和尚かの梅子熟せりの移りより、桃はまた青しといわれしにぞ、大衆余聞を桃青くといえり。私より

好みし名にあらずして、人より呼たる徳と知るべし。仏頂和尚は寛永十九壬午に生れたまひて、二ツまさりなれ共、長命にて正徳五乙未のとし、七十四才にて遷化せし。よりて深川臨泉寺に法縁を結びて、翁は爰に其人の位牌を建置れしなり。

右の記述のうち、一応焦点となるのは、桃青号由来に関する所説と仏頂参禅説の二つである。

芭蕉の「桃青」号初見は、延宝三年五月、東下中の西山宗因歎迎の百韻に一座した際にみえるもの（写本『談林俳諧』所収）であるが、号の由来については、

(A) 芭蕉の仏頂参禅にまつわり、いまだ悟道に至らざる意を「桃は青し」に託したとする説、たとえば去留『芭蕉翁全集』（天保四年以前）の、

和尚庭前の桃を指して笑ふ。翁ただちに其意を悟る。然れどもおのれの未熟なるをいましめ、名を桃青と更らる。

のごとき説と、

(B) (A)の意に加えて、翁祖先の桃地姓の「桃」にも因むものとする説、たとえば宗端『桃三代』序（明和五年刊）の、

我祖翁は其先桃地の党なりとて桃青の二字を称せられしは、梅子不熟の心ならん。

などの説（他に、『詩経』の「桃夭篇」に因むものとしたり、「桃紅李白」の転とするものがある）とが、いずれも「桃青」という文字からの憶測にすぎないながら、いわれてきている。ここで「梅子不熟」とは、大梅法常^{（註）}禅師山居の偈「梅子熟也」——馬祖道禅師の大梅法常を印可せし語で、「大梅」の名に因んで梅子（う

めのみ）の熟するにまかしたという縁語——の転用であるが、支考の「十論為弁抄」「伊賀ノ素生」の項には、

落髪の後には、桃姓のひびきより、桃青ともいへりけるは、梅子不熟の意なりとや。思ふに家名を遂げざるの謂ひならん。

と、前掲(B)説と同じ立場を述べているのに、写本『白馬経』では「梅子不熟」をからませながら(A)説をとっているわけである。あるいは、(A)・(B)両説とも、その起源はそれぞれ支考系の『白馬経』『為弁抄』に発しているものではないかと思う。しかし、この「梅子不熟」説を直接仏頂参禅に結びつけるのは、芭蕉の参禅の時期が、通説では延宝八年深川転居後であるとされているところから、「桃青」号初見の延宝三年とあわせて、不審といわなければならない。

次に、芭蕉の仏頂参禅説については、はやく竹二坊の『芭蕉翁正伝』（寛政十年刊）、錦江『桃青伝』（安政六年稿）をはじめ、『白馬二十五条拔屋』（享和三年写・天理図書館蔵）などの美濃派関係伝書にも種々うかがわれ、高木蒼梧^{（註）}氏の詳細な仏頂研究も知られている。仏頂は延宝二年から天和二年六月まで訴訟のためにしばしば江戸に出て、深川臨川庵に起臥したのであるが、『白馬経』が参禅の時期を延宝七年としているのは、前述した通説に反している。

これに関連していえば、支考は『十論為弁抄』の中では「仏頂和尚」について、

此和尚の在世は天和貞享の比なり。播磨に盤珪禅師といひ、江戸に仏頂和尚といふ。天下に龍虎の名知識なり。いずれも風雅

を称し給へりとぞ。武城の深川に禅刹ありて、芭蕉庵もそこに
ちかし。

と述べており、早大図書館蔵の写本『白馬解』(『十論為弁抄』の
内容とほとんど一致するもの)には、これに「仏頂和尚ハ深川臨
川寺ノ住、翁禅学ノ師也」と加筆してある。しかるに、こうした
記述において、仏頂和尚を盤珪とともに「天下に龍虎の名知識な
り」といつているのは、いささか存疑がある。鹿島の仏頂は、当
時不生禅の導師として世に著名であった盤珪禅師と併称されるは
どの存在であったとは言えないからである。支考がかく称揚した
のは、芭蕉参禅の師としての文飾、誇張であるか、あるいは、
「仏頂国師法語」その他幾多の語録類を残した臨済宗大梅開山一
絲和尚(正保三年示寂)の別号などとの錯覚であるのか、やや判
然としないものがある。

写本『白馬経』所収の「芭蕉伝」は、その大要において、なん
ら新しく、正確な資料とはなりえないが、細部について、ともか
くも一、二の異説を提供していることになろうか。

註1 『為弁抄』第十段「教化ノ秘事」の項にも、大梅法常禅
師、馬祖道禅師の「梅子熟せり」の故事がみえる。

- 2 「仏頂禅師」一〇四(『連歌俳諧研究』18・19・21・22号)
- 3 前記、萩原蘿月著『芭蕉の全貌』第五章参照。

三

さて、同じく第三条「獅子庵蓮二の伝」(支考伝)の全文を以
下に掲げてみよう。これは、はじめに述べたごとく、支考の盤珪

参禅を明確に記載する唯一の資料として注目されるのである。

むかしは、盤珪禅師を師とし、廿六才にして翁に一相見、即
座に以心伝心の事ありしも、元来同じ一見あれば也とぞ称せら
れし。そも師盤珪和尚は播磨国の儒生の子にして狐となり、出
家せしとなり。元和五年己未の生れにて、元禄六癸酉七十五歳
にて迁化、是も幼学より出離の丹心ありて、廿六歳に自悟自證
せしかども、證明の師を尋て未得、故に十德姿にて暮し、其後
世に名高き名師とは仰ぎ申されき。支考法意を授りて、禅俳一
致なるを悟りて、はせをの翁を師とするに、諸所一物即盃一盃
の水を一器に移すがごとし。翁の心を我心とし、我詞を翁の詞
として、則俳諧を説事四十年、爰におゐて彼いふ変通無方よ
り親鸞の妻帯肉食に等しく、大鵬の心何ぞや燕雀の知る所なら
んやと、三十六歳より、俳諧に染みて奥羽行脚に葛の松原を説
初て卅六才に統五論より俳諧の一字の大綱を説り。華嚴の三界
唯一心のごとし。是に仍て統五論を得と熟読すべし。翁の句風
を耳にとめて真似し覚えし古門人等、例の嫉妬の心より恨みも
侍らん、故に宝永八年辛卯八月十六日身没りしと世上へ詠を隠
し、二代目の蓮二坊と名のり、又相弟子に白狂と顕れ、和国に
和文の法格を定め、其余は爰にあぐる物ならじ。

すなわち、ここでは支考の盤珪参禅の説に続けて、盤珪の略伝、
禅俳一致論、さらに支考の小伝が付されており、細部の記述につ
いては、盤珪の出生元和八年を五年、迁化七十二才を七十五才と
誤まっているなど杜撰な点もみえるが、全体の趣旨においては信
をおくべき、根拠をもった内容と思われる。

ところで、獅子庵支考と盤珪禪師との結びつきは、美濃派獅子門流においては、「俗談」の祖としてかなり常識的に伝えられているようである。支考は『本朝文鑑』（享保三年刊）においても盤珪唱歌をひき、また「不生」の説にふれた後、

後ニハ播ノ龍門ニ住シ、後ニハ天下ニ横行シテ仏法東漸ノ禪師トハ云ヘリ。

と称揚しているが、私見によれば、支考の号としての「見龍」の名や、美濃派を「龍門」あるいは「龍の俳諧」と称することも、盤珪の「龍門寺」に因むものであろうし、また「野盤子」^{註2}「盤子支考」の号も「盤珪」の「盤」の一字にゆかりがあるはずである。

思うに、支考における徹底した「俗談」の思想や「平話」の方法にせよ、その創始した仮名詩のモチーフにせよ、紛れもなく「平話説法」を唱導し、庶民の実用禪において「仮名法語」による易行の安心法を提唱、布揚した盤珪流そのものといわねばならないであろう。支考が蕉門俳道の繁栄を意図して、度々大規模な芭蕉の追善興行を施行したのも、盤珪が延宝七年以降、ほとんど年毎に試みた集団修行としての「結制」の行き方に示唆されるところが大きかったに相違ないのである。

かくて、支考の盤珪参禪の事実は、動かし難いものになるが、盤珪の思想の支考への決定的な影響をみる上で、特にここでは、いわゆる支考の仮名詩の方法に関し、(a)「盤珪語録」と(b)支考の『本朝文鑑』の説とを比較して、その一端をうかがっておきたい。

(a) 一日云、身どもも、若い時分には、ひたと問答商量をしても見ましたが、しかしながら、日本人に似たやうに平話で道を問ふがよふござる。日本人は漢語につたなふござって、漢語の問答では思ふやうに道が問つくされぬものでござる。

〔盤珪仏智弘濟禪師御示聞書・岩波文庫「盤珪語録」89頁〕
(b) 俳諧の筆格といふは、仮名にして真名にあらず、真名にして仮名なるを見るべし。倭国は本より倭国の風あらんには、何かは唐人の古文の真宝ならんや。

〔註三本朝文鑑一序〕

すなわち、ここで盤珪の説く「平話」ならびに「日本人」強調の思想と、支考のいう「倭国の風」の主張との類似を、単なる偶然と見過すことはできないだろう。支考が長い間の我国における漢詩の伝統に対し、敢て仮名ノ詩を案出し、越人からの

又文鑑の内にある由、仮名で詩の作り様ありと。詩は日本が始りか、漢が始りかをもしらぬか。詩は文字のつかひやう、心をふくみ義をふくみ、作意の働は其人々の力をつくしつくる事の由、然るに仮名にて何と其様に成べし。

〔俳諧不猫蛇〕

といった強い反駁にあつていささかも動じることなく、大胆に時流に挑んでいったかにみえることなど、その思想的根拠を、やはり直接には盤珪禪のあり方に求めてよいのではあるまいか。（支考はまた『新撰大和詞』で「日本風漢文体」を試みている。）

もっとも、支考が実際にいつ龍門に参禪の機会を得たのか、また、どの程度会下の修業に励んだのかは、いさゝか明らかなでないが、おそらく、その時期は、天和三年十九才で禅機を挫いて大智寺をしりぞくに至る以前の修業僧時代のことであつたと想像され

る。盤珪は一度ならず美濃日立玉龍庵にあり、美濃周辺との結びつきも深く、具体的に支考の郷里に近い大矢田にも大^大清寺という龍門寺系の寺があるが、当時の禅僧の修業の実態からみて、参禅の場所は美濃周辺と限定する必要はないわけである。

註1 山田三秋「盤珪と支考」(『獅子吼』13輯、大正十一年)また、獅子門保存会々長豊吉桑園氏談による。

2 支考の「盤子」号初見は、元禄三年『草刈笛』、「盤」は「盤旋」すなわち「めぐり歩く」意とされ、『和漢文操』(享保十二年刊)「練漉ノ歌」には「野盤ハ先師(支考のこと)ノ万名ナガラ、艸宿水棲ノ意ヨリ起句ニ我名ヲ喚出セリ」とみえる。

3 『白馬経・吟風蛇足書』(県立岐阜図書館蔵。吟風は積翠居吟風、明治三十八年没)には、「里紅(三世盧元坊の別号)聞書」として、「十八才の時、洛建仁寺開山榮西禅師大徳に出家し、導師盤珪禅師の弟子となりて道を得……」とみえるが、もとより信をおくには足らないだろう。

4 大智寺現住職の談による。

四

『甲子夜話』にみられる芭蕉の盤珪参禅説とは次のこときものである。

予が隠荘の北隣は東盛寺なり。その後に小竈あり。この処嘗て俳人芭蕉の棲し跡と云。曰人の俳道にて伝聞せしは芭蕉盤珪禅師に参禅して専ら禅理を問ひしと云。是に由て予思ふに、此頃

正眠国師(盤珪のこと)は天祥公の為に天祥庵に往来ありしかば、芭蕉も隣を卜して棲しなるべし。……(巻六・十四)

右の記述は、要するに、曰人からの聞書としての「芭蕉の盤珪参禅説」を、芭蕉の居住地深川東盛寺(桃青寺)に隣接した天祥庵(天祥寺)が、はやく盤珪に帰依していた肥前平戸藩士天祥公松浦鎮信ゆかりの地であり、従つて盤珪往来の寺であつたことに結びつけたものである。もつとも、前記湯沢氏の論考によれば、芭蕉の東盛寺居住説(錦江の『芭蕉庵桃青伝』など)は誤伝の可能性が強いので、この地理的条件からの推測は成り立ちそうもないという。ただここで、「曰人系聞書」の真偽が問題になるのである。

ところで、湯沢氏は『甲子夜話』所収の説に基づき、盤珪法語と『三冊子』などにみられる芭蕉の俳論——特に、その「帰俗」や「平話」の主張——との思想的影響関係について、慎重に、速断を避けながらではあるが、具体的に言及されている。だがしかし、湯沢氏もふれておられるように、この時代、至道無難から白隠禅師に継承されてゆく「仮名法語」の説法をはじめとして、広義における「平話」の方法は、必ずしも盤珪ひとりの主張ではなかつたことを、まず前提としておかなければならないのである。かの独創的といわれる「不生禅」の思想とても、「不生」とは「仏心」すなわち「不生不滅」であり、それはそのまま禅意識としての「無分別」につながるものである。鈴木大拙博士の指摘されるところによれば、「不生」は結局密教の「阿字不生」あるいは大乘仏教の「無生法」にその根源を溯れるものであるという。そして、

盤珪禪を中世的伝統の中に位地づけることが容易であるとすれば、芭蕉における「私意」を排し、「無分別」「初心」を尊重し、さらに「平話」を用いるという俳諧の方法を、ただちに盤珪的なものへ直結させることは、いささか強弁の感を免れない。因みに、芭蕉の参禅した仏頂禅师もまた、盤珪と同じく臨済宗妙心寺派に属する人であった。

かくて、盤珪禪と芭蕉俳論とのあいだの思想的、方法的な類似点の指摘も、それだけでは、芭蕉の盤珪参禅の根拠としては、甚だ脆弱なものとなりそうである。従って当然、この、時代もかなり隔たった『甲子夜話』所収の説のみをもって、『参禅』の事実を確認するわけにはゆかないのである。以下、最後に、支考の盤珪参禅説容認の立場から、逆に芭蕉の盤珪参禅説への疑問につき幾つかの理由をあげて、私見を述べてみたい。

(1) 紹介した写本『白馬経』に「芭蕉伝」と「支考伝」が併載されているごとく、美濃派伝書の系譜では、獅子門一世芭蕉、二世支考という見解に立つゆえに、両所伝が併記されるのが普通であり、その間また両者が錯綜混入されるおそれも、ある程度考えられる。なおまた、前掲のごとく、『為弁抄』などに仏頂と盤珪を併称していることも、参禅の関係を紛らわしくしている。

(2) 獅子門においては——厳密に言えば正徳元年支考伴死以後についてであるが——いわゆる「祖翁」としてあげるのが芭蕉のことであり、「先師」(また「老師」)と称せられるのは支考を指すのであって、これが蕉門一般の呼称としての「先師」芭蕉

と混同されやすい事実がある。(近代の研究者においても、ときどき誤認がみられる。)

(3) 美濃派においては、後世、獅子門の俳祖として盤珪の名をあげることもあるが、これが獅子門二世である芭蕉の名と結びつきやすい。

(4) 世に宣伝家といわれ、權威づけを好んだ支考が、自らの俳諧の師芭蕉と禅門の師盤珪とを結びつける説を一言も口にしていない。——いうまでもなく、先掲『白馬経』所載の「芭蕉伝」にも通説どおり仏頂の名があげられているだけである。また、「獅子庵蓮二の伝」中、支考が翁に相見して即座に以心伝心を得たことについて「元来同じ一眼あれば也」と述べているのは、「禅俳一致」の立場からの、禅法一般論としてで、特に芭蕉の盤珪参禅を証する意味ではないだろう。

こうしてみると、おそらく、『甲子夜話』の「芭蕉の盤珪参禅説」は、どのような経路によるにしても、後世における何らかの誤伝と判断すべきものではあるまいか。

註1 鈴木大拙『盤珪の不生禅』(『撰集』第四卷)

〔付記〕 本稿は、昭和四十三年度俳文学会全国大会における、『白馬経』をめぐって」と題する研究発表の一部に基づくものである。なお、湯沢賢之助氏の論文・御示教、ならびに雲英末雄氏の御協力に負うところも多い。記して謝意を表します。